

小学校国語科書写の今日的課題と指導法の改善 II

柳下 昭夫

(平成9年10月2日受理)

Modern Issues and Improvements of Teaching Calligraphy in the Japanese Language Course of Elementary Schools II

Akio YAGISHITA

(Received on October 2, 1997)

1. はじめに

本紀要第37集では、「小学校国語科書写の今日的課題と指導法の改善」で、主として書写指導の現状と課題について考察してきた。今回は、前回を踏まえ、「書写力の向上と文字感覚の育成」の問題を、具体的な事例を通して考えていきたい。

書写指導の主眼は、情報文化の伝達の媒体としての文字を、正しく整えて読みやすく速く書く能力の基礎を培うことであり、その基盤はなんといっても、どのような文字をどう書くかといったいわゆる文字感覚の育成にあると思うのである。学校における学習の時間は限られている。これからの時代は生涯学習の時代である。学校で学習した事項を確実に身につけ、日常生活における書く活動を意識化して自ら自己の書写力を高めていこうとする自己学習力の育成につなげていくように、魅力ある書写の指導に絶えず創意工夫を傾けることこそこれからの学校教育に課せられた課題ではないかと考えている。

2. 新しい教育課程改善の方向と書写指導

平成元年告示の学習指導要領の目ざす学力観は、いわゆる「新しい学力観」としてさまざまな視点から論じられてきた。特に新しい学力観では、子供一人一人のよさや可能性を生かすことを根底に据え、子供たちが自ら考え、主体的に判断し、表現したりすることができる資質や能力を身に付けることを重視している。このように考えると、その根底を支えるものこそ、まさに文字力であり書写指導の重要性を痛感するのである。

このような経緯の中で、中央教育審議会は、平成8年7月19日第一次答申を、平成9年6月26日第二次答申を提出し、「ゆとり」の中で「生きる力」をはぐくむことが特に重要であるとし、「生きる力」を次のように説明している。

- ・自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する能力
- ・自らを律しつつ、他人と協調し、他人を思いやる心や感動する心など豊かな人間性とたくましく生きるための健康や体力

また、本答申では、これまでの知識の習得に偏りがちであった教育から、自ら学び、自ら考えるなどの「生きる力」を育成する教育へとその基調を転換していくためには「ゆとり」のある教育課程を編成することが不可欠であり、「完全学校週5日制」の実施を目ざし、教育内容の厳選を図る必要があると述べている。また、「生きる力」が全人的な力であるということ踏まえると、横断的・総合的な指導を一層推進し得るような新たな手だてを講じて、豊かに学習活動を展開していくことが極めて有効であると考えられるとも述べている。

「横断的・総合的な指導」と「授業時数の削減と教育内容の厳選」という今回の教育課程改訂の基本方針は、特に書写指導の今後の在り方に大きな波紋を広げている。

ところでまた、書写の指導について早速新たな問題を投げかける動きも出ている。平成9年度大東文化大学書道研究所主催公開講座(平成9年8月23日・24日)で久米公氏は、「国語科書写の課題と横断的・総合的な学習への対応」を提案している。また、荒川区教育委員会の艱持勉指導主事は、『「総合的な学習」の状況の認識

と国語科書写の果たす役割』と題して、「国語科書写の果たす役割は、単に国語科書写が文字指導を担っているという視点ではなく、各教科、領域にどのように関連しているか、どのような関連までが可能かを明確にすべきであろう。このことは、日常の学校生活、家庭生活、地域の実態と一体的なものでなくてはなりません。手本を見て書くことから離れて日常の国語科書写の生活化が一層求められることは言うまでもない。」と述べている。

日常生活への書写力の定着化と自己学習力へつなげていくことは、言語事項に位置付けられている書写の指導としては当然のことである。しかし、書写の指導が、生活の中での活動に目が行き過ぎて、文字を書くという基礎的・基本的能力の育成を見失うようなことがあってはならない。「手本を見て書くことから離れて日常の国語科書写の生活化が求められる」ということの在り方には今後十分な検討を試みる必要がある。「小学校国語科書写で指導しなければならないことは何か」「小学校国語科書写でなければ指導できないことは何か」を生涯学習と国語力の在り方から明確にし、指導の徹底を図ることこそ、完全学校週5日制における教育内容の厳選と基礎・基本の徹底の課題なのである。

3. 言語事項としての書写指導

国語科における言語事項の内容は、国語による「表現」「理解」の活動の中に当然生きてはたらく基礎的な言語の力を含むものである。書写に関する事項は、文字を正しく整えて読みやすく速く書くことができる基礎的能力を身につけさせることをねらいとしている。一部には、「書写の指導では、硬筆・毛筆の関連指導によって、丁寧に書くことを求めてきた。しかしながら書写の授業以外では逆に、時間的・内容的制約の中で速く書くことが求められており、その際に大切なのは文字の整正さではなく、文の内容である。書くことに対する目的が違い、日常の書写活動と書写の授業が遊離した状況を強く感じる。」という見方もある。これは明らかに文章表現における書写力を過ってとらえている。文章を書くということは、何らかの意味で自分の考えや情報を文字表現を通して相手に伝達することであり、できるだけ読みやすく書くことによって内容も確実・効果的に相手に伝わっていく。そのような表現ができるように書写の授業では文字を書くことの指導を徹底するのである。そしてその基礎・基本として重要なのが書写技能と文字感覚なのである。日

常生活に生きないような書写の指導をすることがそもそも問題なのである。むしろ今日の学生の意見では、今までの書道では、ただ書かされるだけで、字形の整え方や書きやすい運筆について指導してもらった記憶がないということである。このことこそ注意すべきであろう。

4. 書写力の向上と文字感覚

最近の文字表現は実に多様化しその価値観もさまざまである。しかもワープロ等の機器の開発には目を見はるものがある。しかしながらワープロ等の文字に間違いが目立っているという指摘がある。ワープロ等に頼り、正しい表記に対する理解や関心が薄れた結果であるといわれている。正しい文字の習得は手書きによるくりかえしの学習が大切であるということは今更言うまでもない。しかも文字は単に書かれていればよいというのではなく、当然そこには正しさ、美しさ、読みやすさが求められる。

このことは、単に手書き文字だけの問題ではなく、印刷文字についても限りなく研究が続けられている。かつて言語教育の専門誌「言語生活」(1974 No. 272 筑摩書房)で武井邦彦氏(武蔵野美術大学講師・デザイン)は「文字の形の美しさ」という論文の中で次のように述べている。

「活字は、母型によって陽刻された、長さ一インチ弱の合金である。しかし、そのなかには、さまざまな、美への配慮がほどこされているといえよう。活字そのものの大きさは、背から腹までの寸法によって規格化されている。活字の美しさは、一字一字にも必要なことではあるが、さらに、五字十字と連なった場合や、頁面全体の文字群においても発揮されなければならない。すなわち、活字一時分の面積のうちで字面の占める位置および比率は、文字群になっても、読みやすい、美しいものでなければならないのである。

ほどよく印圧のきいた活版印刷物こそ、美の極致である。しかるに、我々は、日本語および活版印刷の構造ゆえに、いわゆる明朝体以外に、使用にたえる書体をえることができなかった。モノタイプ導入の傾向がみられる今日、今度こそ、新しい美への挑戦があって当然と思われるのである。」

どんなに文字の美しさが我々に快い感動を与え、内容の理解を容易にするか、活字の魔力を改めて考えさせられる。そしてこのような活字文化への理解も関心も、実は小学校時代から、どれほどよい文字に接してきたか、

どれほど文字の見方や文字感覚を育てられてきたかにかかっていると思うのである。そしてそのような文字感覚は、いかによい文字に多く接するかということも大切であるが、自ら一点一画を確認し、更に全体の調和に気をつけて丁寧に文字を書く体験を積み重ねてきたかにかかっているのである。単なる書く活動からは書写力の向上も文字感覚の育成も生まれない。書写の指導の必要性が改めて問われなければならないだろう。

美しい文字を書きたいという願いは人間の自然な欲求である、その欲求に支えられて日本の文字文化は今日の漢字仮名の造型を生み出してきた。詩も文章もさまざまな情報も文字という形式を得てはじめて効果的に表現される。「日常の書く生活で大切なのは文字の整正さではなく、文の内容である」というとらえ方は明らかに表現そのものに対する誤解である。

5. 硬筆・毛筆の関連指導と書写力

コミュニケーションの媒体としての文字は、「正しく整って読みやすい」ということが必須条件であり、しかもできれば速く書けるようにしたいものである。そしてそれは、人間の自然な欲求なのである。そしてそのような、「正しく整って読みやすく速く書ける書体」の基準になるのは、時代の要請とその時代に生きる人間の美的感覚であり感性である。小学校国語科書写のねらいは、まさにそのような日本の伝統文化としての文字を、基礎的基本的な事項に精選して、いかに効果的に指導するかということであると考えている。

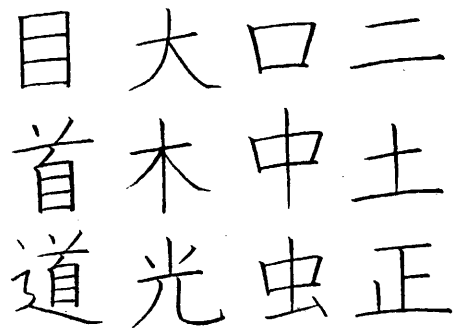
硬筆・毛筆の関連指導はこのような経緯の中で生まれてきたと考える。毛筆を使用する書写の学習は、「元来かなや漢字は毛筆を使用して書かれたものであり、またその筆順なども毛筆を使用する際に考えられたものであるから、文字に対する意識を養い、正確に文字を書く能力をつけるためには、その基礎をつちかうものとして、毛筆を使用して書かせるのがもっとも効果的である。」(小学校学習指導要領解説 昭和43年7月発行)という理由で取り上げられたのであり、その趣旨を生かして、書写力を高める硬筆・毛筆の関連指導を考えることが大切なのである。従って、毛筆を使用する書写の学習では、その指導そのものが硬筆で文字を書く力に直接結びつくようにすることが大切である。

6. 運筆の原理と書写力

硬筆を使って字形を整えて速く書けるようにするためには、何よりもまず、執筆と運筆について指導することが大切である。

用具は人差指と親指で用具が動かしやすいように持ち、前腕を机上につけ、尺骨の部分を支点にして左右に動かすことによって横画が形成される。縦画は指を前後に動かすことによって形成される。横画を速く書こうとすると始筆の筆圧は軽くなり、次第に速さが加わって終筆に向うに従って筆圧が強くなる。また、縦画は、始筆から、終筆まで一定の筆圧で線が形成されていく。ただし、縦画が横画に接する場合や、縦画が内側に向かって進む場合の終筆は筆圧が軽くなるほうが速く書くのに適している。硬筆は毛筆に比べて筆圧の変化が出にくいものである。しかし硬筆たりとも筆圧の変化を適切に生かすことによってきれいな線質が形成され整った字形が生まれてくる。特に漢字の「はね」や「右はらい」「左はらい」は筆圧を上手に生かし、ていねいに書くことによって形が整ってくる。ところで筆圧の変化は、硬筆を使用した場合には、筆圧を加えた部分の浮き沈みによって表れてくる。従って筆圧が比較的効果的に生かされるような用具用材を使って文字を書かせることも指導の効果を高める上では大切なことである。A図の文字は鉛筆で書写したものである。

図1

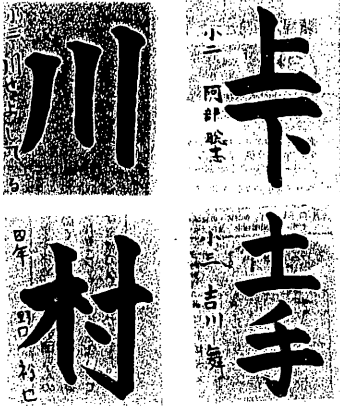


ところで、毛筆を使用する書写の指導は、硬筆で文字を書く能力の育成に役立たないという見方もある。また、硬筆との関連ということなど少しも意識せず、毛筆独自の芸術性を強調したり、個性の尊重という名のもとにほとんど指導を加えないという指導を目にすることもある。「のびのびと書けたよい字」「力強く元気があってよい。」

とどという評価もよく目にする。これでは、正しく整った文字を書く力を育成することにはならないのである。

次に示したのは、ある新聞の日曜版に掲載された、いわゆる応募優秀作品である。

図2

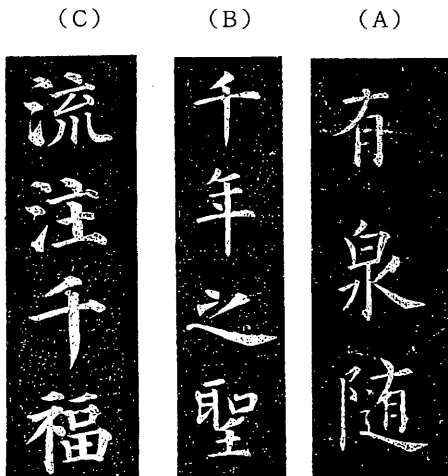


新聞応募児童作品

ここに掲載された作品は、いずれも始筆、終筆に筆圧が強く加えられ過ぎており、硬筆を使用して自然な運筆で書写したもの(図1)とかなりの相違がある。

書についての見方考え方にはさまざまある。しかし小学校国語科書写の指導では、生涯教育の基礎を培い硬筆に生きる書写力を育成することをねらっており、このためにはどういふ文字を書かせるかということも最大の課題である。次に示したのは唐時代の名跡である。

図3



中国法書選(二玄社)(縮少)より

Aは欧陽詢の九成宮體集銘、Bは虞世南の孔子廟堂碑、Cは欧陽詢、虞世南よりやや遅れて世に出た盛唐時代の顔真卿の多宝塔碑(いずれも部分縮小)である。これらの書家について高等学校芸術家書道指導資料鑑賞編(文部省著作)では次のように説明している。

「楷書は初唐に至り、更に凝集し、虞世南、欧陽詢の名家が出て、ここに中国書道の典型、楷書の理想が確立された。その楷書は分間布白による正しい構築性を発揮し、しかも豊かな精神内容をほどよく盛った、実に典型たるに値する様式であった。整った姿態と豊かな精神飽和こそ、隋唐書道の理想だったのであろう。

盛唐になると、虞世南・欧陽詢・褚遂良とともに“唐の四大家”と称される顔真卿がでて、書法はまた一新され、肥満した豊かな態勢の表現となった。」

漢字の楷書体は唐時代にすでに完成し、その作品は今日まで書の軌範となっている。ところでこれらの書のうち今日の硬筆に生きる書はどちらをとったほうがよいだろうか。次にしめたのは、小学校国語指導資料「指導計画の作成と書写の指導」(昭和55年8月文部省発行)の中で書写されているものである。

図4



小学校国語指導資料(文部省)

小学校国語指導資料(図4)に示された書体は、図3のA・Bの書体に近く、この書体のほうが、図3のCの書体より運筆が自然で形も整っており硬筆に転移しやすい書体ということができよう。硬筆では、図3のCのような用筆は不可能に近い。もちろん顔真卿の書は、名筆であり毛筆の特質をいかに生かしているといえる。しかしこのような運筆は硬筆では不可能といえる。毛筆を使用して学習した書写の能力を硬筆に生かすようにするのが小学校国語科書写のねらいであるなら毛筆を使用する書写の指導においては、最も硬筆に生き

るような運筆で指導することが効果的であろう。

ところが依然として硬筆の書写に生きないような運筆による書写の指導が行われているということも事実である。硬筆・毛筆の関連指導と建前としては言っているが、どういう文字を、どういう運筆で書かせることが硬筆による書写力を高めることになるのか、十分に考えないで指導しているのではないかと思われるような授業に接することもしばしばある。

硬筆・毛筆の関連指導で最も大切なことは、毛筆を使用して文字を書写する中で、筆圧のかけ方、筆の運び方、とめ、はね、はらいなどの筆づかいを理解し、それを硬筆で書写するときも生かせるように、その基礎・基本をしっかり身に付けさせることなのである。

毛筆を使用する書写の基準は、硬筆の運筆に最も近い運筆で書かれた文字に置くことが硬・毛の関連指導になると言っても過言ではない。特に短い横線が多い漢字では、顔真卿のように始筆・終筆に筆圧をかけ過ぎると線質がきたなくなってしまう、また書く速さも落ちてしまうということになる。

7. 漢字における点画の構成と文字感覚

杉浦康平氏は、その著「かたち誕生」の中で次のように漢字字形の特質について触れている。

「ところで、なぜ漢字は四角い場のなかに書かれるのか、次に、それについて考えてみましょう。

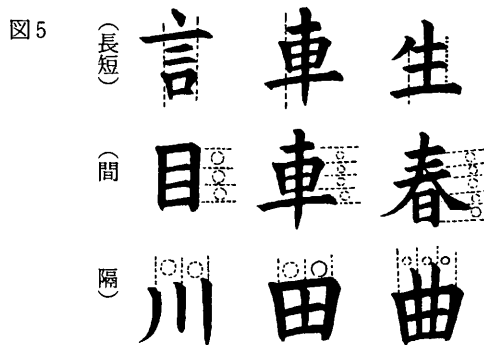
四角い場を基本とする文字は、漢字しかないと思います。そこで漢字は、縦組み・横組みという融通無碍の組み方ができる。これは世界の文字文化のなかでも、たいへん珍しいことです。

さらに漢字は、その一点一画が、縦・横の分割格子にのせられて記されています。縦・横の分割に斜線を加えて、複雑な文字を作りあげる。」

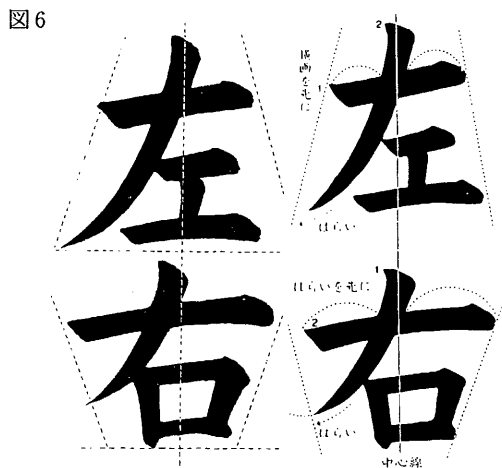
いうまでもなく、漢字は横画と縦画の組み合わせが基本である。横画と縦画が接し、交わり、更に部分と部分とが組合わさって次第に複雑な字形を構成していく。

横画が並べば当然、方向と長短と間隔が生まれてくる。横画の方向は、尺骨の部分の支点にした左右の運動によって生まれてくる。従って当然やや右上がりになる。長短は一つの文字に一箇所だけ強調される部分生まれ、他の点画はほぼ同じ長さになるのが普通である。また間隔は小学校国語科書写では一般に等間隔になるように指導されている。しかし古典の名跡を見ると上部ほど広く、

下に行くに従ってやや狭くなっているようである。これは一つのバランス感覚が生み出したものと思われる。図5は、点画の長短・間隔についての一例を示したものである。



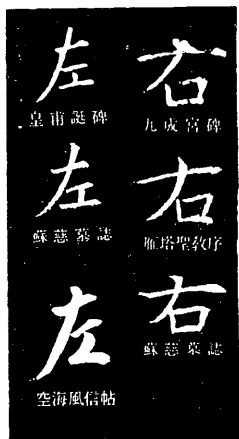
小学校国語指導資料(文部省)



教科書教材

字形は筆順とも深いかわりがある。図6は、小学校国語科書写のすべての教科書で、「字形と筆順」という形で取り上げられている教材である。漢字楷書はほぼ一定の筆順に即して書くほうが字形も整いやすい。点画を構成する場合、筆順の第一画にあたる部分は一般には短く太くなるほうが書きやすい。第一画が横線になる「左」は横画が太く短く、左はらいがやや細く長くなっている。「右」は第一画が左はらいから始まるので、当然はらいが太く短くなり横画が長くなり、「左」の△に対し、「右」は▽の字形になっている。このことは、古典の名跡にも歴然と現れている。(図7)

図7



左
右

(筆者)

書道字典(角川書店)より

おらず点画の接し方にも不適切なものが見られる。しかしなによりも注意したいのは、ここでの指導のねらい以外のことであるが、横画・縦画の筆づかいがあまり適切でないということである。始筆、終筆にあまりにも筆圧をかけすぎている。そのことが結果として字形のバランスにも影響している。書写の指導は技能の積み重ねである。それぞれの教材で確実にねらいを達成していかないと、次の学習が十分に成果をあげ得ないということになる。

漢字の指導では、まず横画・縦画が、自然な運筆できれいに書けるようにし、更に点画と点画との調和に気をつけ丁寧に書くようにすることが大切である。丁寧に書くことの中で運筆の技能を身に付け、点画の構成や字形に対する文字感覚を磨いていく。文字のよしあしを見分ける確かな目が養えれば、当然日常生活においても、正しく整った文字を書こうとする意欲や態度も生まれてくるものである。

図8



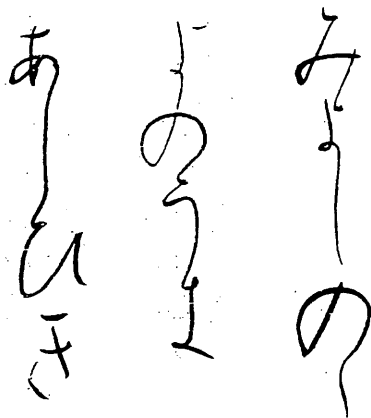
第33回全日本書写書道教育研究会静岡大会
(平成4年10月) 資料より

ところで、児童の作品を見ると、さまざまな字形の文字が見られる。(図8)は、平成4年10月に行われた第33回全日本書写書道教育研究会静岡大会の研究発表として研究紀要に載せられたものである。この作品は児童が授業の最初に書いた作品であり、もちろん指導が加えられたものではない。点画のバランスが十分にとれて

8. 平仮名の指導と文字感覚

平仮名は線の組合せが極めて単純である。平仮名は漢字の草書体を大胆に略体したものから生まれた。草書体は速く書くに適した書体であり、その運筆の特色は、動きながら筆が紙面に接し、動きながら紙面から離れていくといった極めて流動的なところにある。平仮名の運筆も当然、動きながら筆が紙面に接し次第に筆圧を加え、やがて筆圧をゆるめて、穂先を抜くように筆を紙面から離していく。従って、平仮名の線質は線の中ほどがふっくらと丸味を帯びるところにある。平仮名の線質は流動美にあるとあってよからう。次に示したのは紀貫之の筆になるといわれている高野切古今集〔第三種〕の部分である。

図9



高野切第三種伝記貫之筆(二玄社) 縮小

もちろん、今日一般に書写される平仮名は、これほど連続を多く用いてはいないが、しかし、名跡のこのような線質、全体の文字の流れを頭に入れ、その上で、漢字との調和を考え、児童の実態に即して適切に書写していくように指導したいものである。

次に示したのは、新聞応募児童作品であるが、始筆、終筆で筆圧を加え過ぎている。これは平仮名の用筆ではなく、漢字楷書のしかも顔真卿の書法に近い書きぶりになっている。いかに低学年の指導でも、このような運筆で書かせていると、将来平仮名の筆づかいに入ることがむずかしくなってしまうであろう。「しっかり書きなさい」「堂々と紙面いっぱい書いています」というような指導では平仮名を書写する力は育たないのである。

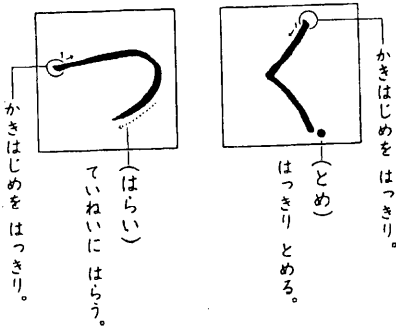
図10



新聞応募児童作品

こうした傾向は国語科書写の教科書にもみられなくはない。次に示したのは小学校一年用国語科書写のある出版社の説明である。もちろん硬筆の文字そのものの始筆や終筆に極端に強い筆圧はみられないが、「く」の始筆はやや筆圧の加え過ぎが見られるようである。また、「かきはじめをはっきり。」という説明は児童の誤解を招きやすい説明であるということもできよう。

図11

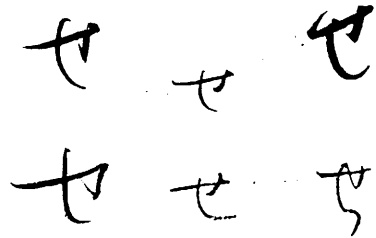


小学校書写教科書より

(1) 古筆に見る平仮名の横線

動きながら紙面に接し動きながら穂先を抜くように紙面から離れていくといった運筆によって平仮名が書かれていくとすると、その特色が長い横線に特に顕著に現れてくると思われる。次に示したのは「せ」と「す」の古筆であり、平仮名の横線の特色がよく現れている。

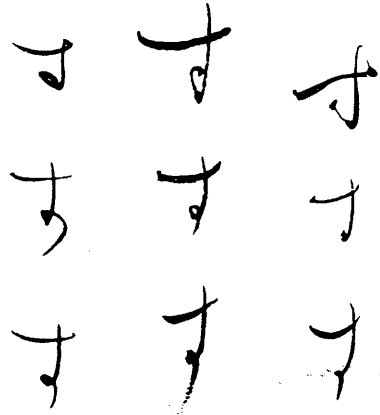
図12



寛平御時后 粘葉朗詠 高野切三種
宮歌合(十)

書道字典(角川書店)より

図13



傳西行 山家 卷子古今 元永本古今集
心中抄第一種

書道字典(角川書店)より

「せ」も「す」の横線も下方に湾曲し、中程に筆圧が加わり、ふっくらとした表現になっている。これは、平仮名の運筆の原理に従えば当然のことである。もちろん、元永本古今集のように「す」においては、上方に湾曲しているものもないわけではない。しかしこのような線質の「す」は極めてすくない。

(2) 国語科書写教科書に見る平仮名の横線

ところで国語科書写の教科書における「せ」「す」の横線はどのようになっているだろうか。次に示したのは

中学校国語科書写の教科書に書かれている三社の文字である。中学校国語科書写の教科書では、「せ」「す」の横線が下方に湾曲している例は極めて少なく、むしろ上方に湾曲しているものが多い。

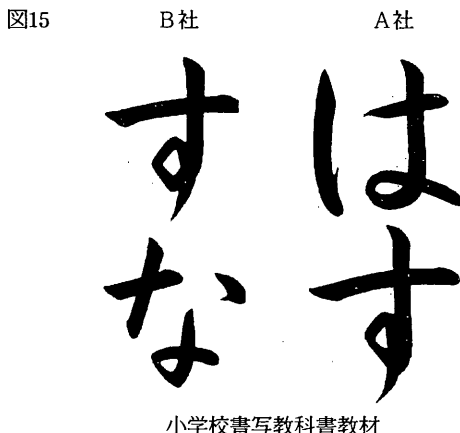
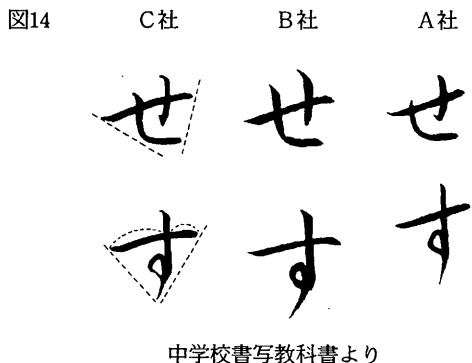


図15は、小学校国語科書写四年生の教科書の教材である。A社の「はす」にしてもB社の「すな」にしても、「す」の横線はいずれもやや上方に湾曲している。特にB社の「な」の短い横線と斜めの線は漢字楷書の運筆に近いともいえそうである。このような運筆がまた平仮名の字形に影響しているともいえよう。

平仮名の書写指導のポイントはまず運筆にあると考えている。しかもそのような運筆は特に低学年では抵抗が大きい。平仮名先習の我が国の国語教育が負わされた宿命なのである。しかしそれはいたしかたのないことである。

「しっかり書きましょう」と指導するのではなく、「あまり始めと終りに力を入れすぎないように気をつけていねいにかきましよう」と支援したらどうであろう

か。

平仮名の指導は自然な運筆でリズムを生かし、きれいな線質が出るように書きたいものである。そしてそれを支えるものは平仮名の線質をどうとらえて書くかといった文字感覚にあると思うのである。そしてそのような豊かな美的感覚を育てるには、できるだけよい教材を示すことである。これからの書写指導は、手本を見て書くことから離れて日常の書く活動に重点が移るのではなく、できるだけ良い教材を精選してくりかえし練習し、その中で確かな文字感覚と書写技能を身につけさせ、それを日常生活にて生かしていられるようにしたいと思うのである。児童は自分でも納得できる良い文字が書けたときはじめて学習の喜びを感じ、更にうまくなろうとする意欲をかきたて、自ら学習するようになるのである。それが自己学習力を身につけることであり生きる力を育てることになるのである。そしてそのような適切な支援を子供たちは教師に期待している。適切な支援は、教師のすぐれた文字感覚と書写技能から生まれてくる。

国語科書写の教科書の質と教師の支援の在り方を改めて考えてみる必要があると考える。

参考文献

- 中央教育審議会 第一次・第二次答申
 国語科書写の課題と横断的・総合的な学習への対応
 大東文化大学教授 久米 公
 「総合的な学習」の状況認識と国語科書写の果たす役割 荒川区教育委員会指導主事 匂持勉
 言語生活 1974 No272 筑摩書房
 小学校学習指導要領解説つき 昭和43年7月文部省
 九成宮醴泉銘 中国法書選 二玄社
 孔子廟堂碑 中国法書選 二玄社
 多宝塔碑 中国法書選 二玄社
 高等学校芸術家書道指導資料鑑賞編 文部省
 小学校国語指導資料指導計画の作成と書写の指導 文部省
 かたち誕生 杉浦康平 日本放送出版協会
 書道字典 角川書店
 かな名跡大字典 角川書店
 第33回全日本書写書道教育研究会静岡大会研究紀要
 毛筆書写指導の方法 水田光風監修 光村図書
 小学校国語科書写教科書(日書・東書・教出・光村・学図・大書)